

住むことを学ぶ ——ハイデガー居住論とモダニズム建築——

稲田 知己

はじめに

今回のハイデガー・フォーラムのテーマは、ドイツ工作連盟主催ダルムシュタット建築展でハイデガーがおこなった講演『建てること、住むこと、考えること(Bauen Wohnen Denken)』(1951)¹に由来する。そのさい「**住む**とは、死すべき者たちが大地のうえに存在するその仕方である」(GA7,150)。が、事柄をいっそう子細に観察するなら、「《大地のうえに》ということは、《天空のしたに》ということすでに意味している。この両者は、《神的な者たちのまえにとどまること》をともに指示し、《人間たちの相互共同性のうちへと帰属して》いることを含意する」(GA7,151)。こうしたことから、大地・天空・神々・人々という「四者のこうした一重の襞を、われわれは四方城(Geviert)なるものと命名する」(GA7,152)とされた。これがハイデガー居住論(Topologie)の中心概念であることは衆目の一致するところだろう。

後期ハイデガーが〈四方城〉と名づけた居住空間は、われわれ現代人にとってあまりに空想的にひびく。しかしその一方で、この大地に人が住めなくなる危機的状況があらわになるにつれ、「**住むことをまず学ばなければならない**」(GA7,163)というかれの提言はわれわれに感銘をあたえるようにも思われる。たとえば、上述のダルムシュタット建築展には**モダニズム建築**を主導してきた錚々たる顔ぶれが列席していたが、ハイデガーの講演はハンス・シャローン——ア・パースペクティブな空間構成による

注

Martin Heideggerからの引用はVittorio Klostermann社による全集版からのものとし、GAのあとに巻数と頁数を記し、本文中に挿入した。また、Friedrich Nietzscheからの引用はWalter de Gruyter社のkritische Studienausgabeからのものとし、KSAのあとに巻数と頁数を記し、同じく本文中に挿入した。

なお、引用原典中の強調と引用符は、それぞれ傍点と《 》で表記した。筆者自身の強調、術語明示、補足説明には、それぞれ太字、〈 〉、[]を用いた。

¹ つぎの文献は、『建てること、住むこと、考えること』という表題に、「人間活動のアリストテレス的3区分の反響、すなわちポイエーシス・プラクシス・テオーリアの反響」を聞き取ることをみとめているけれども、ハイデガーと哲学的伝統とを性急にかさねあわせている点で、かれの思想への無理解をしめしている。Jussi Backman, Für das Wohnen denken. Heidegger, Arendt und die praktische Besinnung, in: *Heidegger-Jahrbuch3 Heidegger und Aristoteles*, Verlag Karl Alber, 2007, S.200.

代表作「ベルリン国立図書館」は、ヴィム・ヴェンダース監督の『ベルリン・天使の詩』のロケ地としても有名である——を感激させた²。のちに二人は、いっしょにギリシャ旅行をするほどの親しい友人となった³。

これからしばらくのあいだ、われわれは〈住む〉という事柄について哲学的に省察したい。そのため、ハイデガー居住論をつらぬく内的思惟動向を解明することはもちろんであるが、たんにそればかりでなく、哲学者がまさにそこに住んでいた〈時代〉という大きな物語テキストを忘れないように留意しよう。つまり、本発表の目的は、20世紀に勃興したモダニズム建築とハイデガー居住論とを思想的に対決させることによって、〈住むことを学ぶ〉ことである。

1. いつヘルダーリンはハイデガーの宿命となったか

『建てること、住むこと、考えること』と同年に、『詩作的に(dichterisch)人間は住む』も講演された。後者の表題はヘルダーリンの詩句から直接とられており、ハイデガーが〈住む〉ことについて考えるさい、つねに念頭にあったのはヘルダーリンだった⁴。「ヘルダーリンの詩作はわれわれにとってひとつの宿命である」(GA4,195)。問題は、いつヘルダーリンがハイデガーの宿命となったか、ということである。

ふつうには、それは1934年、すなわち、フライブルク大学総長職辞任以後のこと

² Adam Sharr, *Heidegger for Architects*, Routledge, 2007, p.1.

³ ハイデガーとシャローンはベルリンで知り合いとなり、1959年4月5日にハイデガーがシュトゥットガルトのシャローンを訪問したり、1967年4月のアテネ旅行〔ハイデガー講演目的〕をいっしょに楽しんだりした。Vgl. «*Mein liebes Seelchen!*» *Briefe Martin Heideggers an seine Frau Elfride 1915-1970*, herausgegeben, ausgewählt und kommentiert von G. Heidegger, Deutsche Verlag-Anstalt, 2005, S.332,365.

ハイデガーと建築家との交流について、もう一例あげておこう。北欧のアルヴァ・アールトがハイデガーの『講演論文集』を書き物機のうえにしていると伝え聞き、ハイデガーがかれとコンタクトをとろうとしたことがあった。ただし、建築家の死により、これは実現しなかったけれども。Vgl. Heinrich Wiegand Petzet, *Auf einen Stern zugehen*, Societäts-Verlag, 1983, S.197.

⁴ ハイデガーが〈住む〉を考えるために参照したヘルダーリンの詩句には、以下のものがある(GA75,385f.)。できるだけ簡潔に列挙すると、「詩作的に人間はこの大地のうえに住む」(『うるわしき青空に……』)、「根源の近くに住むものは、その場所を去りがたい」(『さすらい』)、「最愛の者たちは、遠く隔てられた山々のうえに、[だが] 近くに住む」(『パトモス』)、「美しくかれ〔イスター〕は住む」(『イスター』)、「さらにもっと高く、光のかなたに、浄福そのものの神が住む」「かれ〔神〕はひとり静かに住む」(『帰郷』)、「葉を落としたマストのしたで、何年も、孤独に住む」(『追想』)。

同じ箇所(GA75,385)で、とりわけハイデガーが参看をもとめているのが、『存在と時間』における、〈内・存在〉の語源的考察から「住む」を取り出すくだり(GA2,75)である。この点に着目し、トポロギーという根本視座からハイデガーの思惟の全行程に徹底的な解釈をほどこしたのが、川原栄峰『ハイデッガーの思惟』(理想社、1981)である。

であると考えられている。通説のゆるがぬ論拠とみなされるのは、1934/35 年冬学期がハイデガー最初のヘルダーリン講義(GA39)だった、というものであろう。この点では、ハイデガーとヘルダーリンの解釈を仕事の中心にすえてきたラクー＝ラバルト⁵にせよ、つぎのペゲラーの解釈にせよ同断である。ペゲラーは『芸術作品の根源』(1935/36)という論文について、「芸術作品論文は——現実の国家社会主義革命にたいする幻滅のあとで——政治的なものとの対決から芸術へと撤退しているから」、それは「ロマンティック」であると特徴づけた⁶。ハイデガーは政治の舞台で挫折したから芸術や詩に逃避したというわけである。

しかしこうした解釈では、ハイデガーのナチス加担という問題を解き明かすことはできない。1933 年、もともと非政治的だったハイデガーが、弟子たちもおどろくほど唐突に⁷、政治参加を決意したのはなぜか。また、あの時代状況のもとでは相当な覚悟が必要だったはずだが、なぜかれは 1 年足らずのあいだに総長職からしりぞいたのか。この謎を解く唯一の鍵がヘルダーリンなのである。

師リッケルトの 1913/14 年冬学期講義のさいに、若きハイデガーはヘルダーリンの再発見者ヘリングラートについてすでに聞きおよんでいた⁸。この詩人は「ひとつの新しい体験」⁹となった。1925 年においても、「ぼくは多くの時をヘルダーリンとともに生きています」¹⁰と、『存在と時間』草稿執筆中のハイデガーは恋人アーレントに告げている。そして、その主著が未完のまま途絶したのち、1931/32 年冬学期講義『真理の本質について』において、「学」よりも「芸術」(GA34,63)が、とりわけ「詩作(Dichtung)」(GA34,63)が、かれにとって重要となった。「現実的なものの発見という本質的なものが生起したのは、また生起するのは、諸学によってではなく、根源的な哲学によって、偉大な詩作とその企投（ホメロス、ヴェルギリウス、ダンテ、シェークスピア、ゲー

⁵ ラクー＝ラバルトは、「1934 年にヘルダーリンを（メシアとしてではないにせよ）預言者として選択したことから出発する」ことを、自明なこととしている。

Philippe Lacoue-Labarthe, *la pauvreté (die Armut)*, Presses universitaires de Strasbourg, 2004, p.27.

⁶ Otto Pöggeler, *Neue Wege mit Heidegger*, Verlag Karl Alber, 1992, S.174f. Vgl. auch O. Pöggeler, *Philosophie und Politik bei Heidegger*, Verlag Karl Alber, 1972, S.157.

⁷ Vgl. Hans-Georg Gadamer, *Oberflächlichkeit und Unkenntnis. Zur Veröffentlichung von Victor Farias*, in: *Antwort Martin Heidegger im Gespräch*, Neske, 1988, S.153.

⁸ Vgl. *Martin Heidegger/ Imma von Bodmershof, Briefwechsel 1959-1976*, herausgegeben von Bruno Pieger, Klett-Cotta, 2000, S.132f.

⁹ *«Mein liebes Seelchen!» Briefe Martin Heideggers an seine Frau Elfride 1915-1970*, a.a.O., S.77.

¹⁰ *Hannah Arendt/ Martin Heidegger, Briefe 1925-1975*, Vittorio Klostermann, 3., durchgesehene und erweiterte Auflage 2002, S.20.

テ)によってである。詩作は存在者をいっそう存在者的にする」(GA34,64)。

ここではまだヘルダーリンの名はあげられていないけれども、すでに重大な転機がおとずれていたのだろうか。ハイデガー自身の回想では、「……原存在(Seyn)それ自身とその真・理とが究極的な問いにあたいするものにはじめてなった瞬間 (『真理講演』1929/30年 [ママ])、ヘルダーリンの語が、すでに以前からほかの詩人たちとならんでさしあたりは知られていたのだが、運命となった」(GA71,89)。指示された現行テキスト『真理の本質について』(1930)のなかで、当の詩人が言及されているわけではない。が、ともかく、〈存在の意味への問い〉から〈存在の真理への問い〉へとハイデガーの思惟が変貌した「瞬間」¹¹、たしかに**総長職就任以前に**、かれはヘルダーリンと宿命的に出会っていた。

この関連で決定的に重要なのが、刊行者によって成立年代が1931/32年とされる¹²、前掲『芸術作品の根源』の「初稿」である。ハイデガーはここで、「民族」という歴史的共同体の生成の現場をヘルダーリンのうちに看取した。「ヘルダーリンの詩作は、どんな舞台や映画や戯れ歌よりも、われわれの民族の言葉のなかで——たえほとんど予感されていなくとも——いっそう現実的である」¹³。「現(Da)に存在している、という、この仕方を、われわれは歴史と名づける」¹⁴のだが、「民族はみずからの現のうちへとつねにすでに投げられている(詩人ヘルダーリン)」¹⁵。そして草稿の末尾で、かれの詩句「根源の近くに住むものは、その場所(Ort)を去りがたい」が引用されるとともに、「この大地のうえでの真正な土着性(Bodenständigkeit)としての、真に根拠づけられた歴史的現存在」¹⁶について語られた。ヘルダーリン的な〈住む〉こと、大地に歴史的に根づくこと、すなわちハイデガー居住論への注目すべき一歩が、このときはっきりと踏みだされた。

とすれば、すでに明白だろう。ハイデガーが政治の表舞台へ挺身しようとしたのは、

¹¹ つぎの回顧も参考のこと。「1932年春以来、《原生起から》『哲学への寄与論稿』という草稿のなかでその最初の形態を獲得した構想が、その根本諸動向において確定している」(GA66,424)。

¹² Vgl. Martin Heidegger, *Zur Überwindung der Aesthetik. Zu „Ursprung des Kunstwerks“*, *Heidegger Studies vol.6*, Duncker & Humblot, 1990, S.5, Anm. また、「時間上、それ『芸術作品の根源』は、1931と32年の幸運な研究時間に由来する」とあるのも参照。*Martin Heidegger/ Elisabeth Blochmann Briefwechsel 1918-1969*, herausgegeben von Joachim W. Störck, Marbach am Neckar, 1990, S.87.

¹³ Martin Heidegger, *Vom Ursprung des Kunstwerks, Erste Ausarbeitung*, in: *Heidegger Studies vol.5*, Duncker & Humblot, 1989, S.15.

¹⁴ A.a.O., S.19.

¹⁵ A.a.O., S.20.

¹⁶ A.a.O., S.22. なお、「土着性」概念は、GA34, 209にも登場する。

ヘルダーリンという宿命に殉じるためだった。総長辞職直後の発言では、「ヘルダーリンはこの隠蔽された困難なこと、すなわち〈ドイツ人の詩人〉としての〈詩人の詩人〉であるがゆえに、それゆえかれはわれわれの民族の歴史においてまだ力をえていない。かれはまだそうになっていないのだから、そうならなければならない。これと行動をとるにすることこそ、最高かつ本来的な意味における《政治》である」(GA39,214)。つまり、ハイデガー哲学における政治とは、ヘルダーリンの詩作を歴史創設の中心にする居住論にほかならなかった。

しかも看過できないのは、ナチス加担へと決断させた当のものがナチスからの離反をうながすものだった、ということである。ハイデガーはヘルダーリンによって政治参加を決断したのであって、ニーチェではなかった。「ムッソリーニもヒトラーも……ニーチェによって本質的に規定されている」(GA42,40f.)ことがはっきりするにつれ、かれはニーチェへの批判を強めるとともに運動からも遠ざかった。

「政治は国家の造形芸術だ」とはゲッベルスの周知の言葉だが、ナチ国家体制のきわだった特色は、政治が芸術を屈服させたところにあるだけでなく、政治みずからが最高の芸術たろうとしたところにあった¹⁷。ラクー＝ラバルトがベンヤミンに依拠しつつ論じたように、「《政治の美学化(esthétisation de la politique)》」が、本質的に、国家 - 社会主義の綱領をなしていた¹⁸。ハイデガーもこの現実がよくわかっていたし、だからこれと哲学的に対決しようとした。たとえば、『哲学への寄与論稿』(1936-38)では、「美学の超克という課題」(GA65,503; usw.)が提起されている。1936/37年冬学期講義『ニーチェ、芸術としての力への意志』では、ハイデッガーは芸術を考察するさいに創造者や受容者の立場からではなく〈作品〉から出発するのであるから、「ニーチェの生理学的美学」(GA43,78)、すなわち「芸術は芸術家から把握されねばならない」とする「男性美学」(GA43,82)が問いに付されている。また同学期のゼミナールでは、シラーの『人間の美的教育についての書簡』が取り上げられ、「美学的なもの、美、芸

¹⁷ この観点からのナチズム研究として、田野大輔『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』(名古屋大学出版会、2007)をあげておく。

¹⁸ Philippe Lacoue-Labarthe, *La fiction du politique*, Christian Bourgois Editeur, 1987, p.92. 周知のように、ベンヤミンは『複製技術時代の芸術作品』において、「フュッセルが推し進める政治の美学化にかんしては、このような事情である。このフュッセルにたいしてコミニズムは、芸術の政治化をもって応酬する」と主張した。Walter Benjamin, *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*, in: *Gesammelte Schriften Bd.1-2*, Suhrkamp, 1991, S.469. この発言の前半ならばハイデガーもみとめただろうが、その後半には反対したことだろう。

術は、文化の道具である」¹⁹とする「政治的国家という美学的国家」²⁰の現状が揶揄されている。

この点で、1938/39年に由来するつぎの文献は、示唆にとんでいる。「どんな様式における《芸術》も、たんに形而上学の内部に、形而上学とともにあるにすぎない。それゆえ、《世界観》には芸術政治が、《芸術》の続行がある。だが、どこにも《詩作》はない。原存在の根拠づけ(Gründung)——創建(Stiftung)としての詩作。このことから、芸術作品についての諸講演のなかで問われていたことがいっそう鋭敏に明らかになる。もはや芸術としてではなく、詩作。形而上学の終末とともに《芸術》の終末」(GA67,108)。この文章はハイデガーの自己批判でも自己弁明でもあつたであろう。かれはヘーゲルと同じく「芸術の終末」を説きながら、ナチスの「世界観」「芸術政治」を批判し、国家社会主義の形而上学的背景を洞察するとともに、しかしあくまで歴史の「詩作」的な「根拠づけ」「創建」は正しいと考えていたのである。総長時代のかれの過誤は、この詩作が美的芸術政治と両立しようと判断したところにあつた。だが、かれはみずからの誤りに気づくやいなや、この同じ詩作という立脚点から、ナチズムの哲学的基盤を超克しようとしたのである。

以上から、ヘルダーリン的な〈住む〉がハイデガーにとっていかにかけがえのないものだったか、その来歴から明瞭になった。それは、たんに後期ハイデガーが偏愛した詩語にすぎないのではなく、現実の政治への参加とそれからの離脱をもたらした当のものであり、〈存在の真理への問い〉さらには〈存在歴史的(seinsgeschichtlich)思惟〉の生誕地にほかならなかつた²¹。この場所が最後まで放棄されることはなかつた。1931/32年の文献ですでに引用されていたように、「根源の近くに住むものは、その場

¹⁹ Martin Heidegger, *Übungen für Anfänger. Schillers Briefe über die ästhetische Erziehung des Menschen*, Wintersemester 1936/37, herausgegeben von Ulrich von Bülow, Deutsche Schillergesellschaft, 2005, S.131.

²⁰ A.a.O., S.39.

²¹ ハイデガーの思惟の道には「意味——真理——場所 (τόπος)」(GA15,344)という道標が立っており、それぞれ〈存在の意味への問い〉、〈存在の真理への問い〉、〈存在の場所もしくは所在場所への問い〉と定式化されたことは、だれでも知っていよう。ところが、これらの3段階を当然のように前期・中期・後期とよびならわし、そのためしらすらううちに、それらを直線的に継起する時間秩序にもとづいて理解しているとしたならば、それはほとんどハイデガーの思惟の内的動向とは無縁な、あまりに通俗的な解釈というべきではないだろうか。〈存在の場所への問い〉もしくは〈居住論〉は、むしろ事柄上は〈存在の真理への問い〉に先行ないし同行し、政治的な過誤があつたにもかかわらず、けつて放棄しえなかつたハイデガー哲学の立脚地なのである。

なお、ハイデガー哲学の全道程にかんする詳細は、拙著『存在の問いと有限性——ハイデガー哲学のトポロジー的究明——』(晃洋書房、2006)を参照されたい。

所を去りがたい」のである。

2. ヴァイセンホーフ・ジードルング、あるいはモダンな住まい

哲学の伝統的な諸問題のうちに〈住む〉は属していない。とはいえ、現代哲学のなかでまったく注目されなかったわけでもない。とくに、「言葉は存在の家である。この住まいのうちに人間は住む」(GA9,313)とした『《ヒューマニズム》についての書簡』(1946)はよく知られており、サルトルの実存主義批判の文脈でなんらかの影響をあたえた。たとえば、「《世界に投げ出されて》いるまえに……人間は家の揺籃のなかにおかれている」²²とバシュラールはのべたし、ボルノウは「実存主義者は……住むということを知らない」²³と論難した。ここに通底しているのは、人間が日常的に家に住む、その内密なやすらぎの先行性の強調であり、それは、「女性が……家(Maison)の内面性および住むことの条件である」²⁴とするレヴィナスにおいても同様かもしれない。しかしながら、これら少数の哲学者のあまりに専門的な論争史に終始することには、〈住む〉という事柄をかえって見失う危険性がひそんでいるのでないだろうか。そこで本発表がこころみたいのは、ハイデガー居住論をその時代という巨大な物語テキストから眺めることである。すると風景は一変する。

ちょうど『存在と時間』(1927)が公刊されたとき、シュトゥットガルト郊外で「住まい」と銘打たれた住宅展が開かれた。建築史の分野で著名なヴァイセンホーフ・ジードルングである。これを主催したのは、建築家ヘルマン・ムテジウスらが1907年に「芸術、工業、手工芸の協同による産業製品の向上」²⁵を目的として設立したドイツ工作連盟であり、ソファから都市計画まであつかった。このとき、ルートヴィッヒ・ミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジエ、ヴァルター・グロピウス、ブルーノ・タウトをはじめとして、数カ国から16人の前衛建築家が招待され腕を競った。会場には、「ノイエ・ザッハリヒカイト運動」²⁶を彷彿させる、無装飾で白い陸屋根の住宅が建ちならび、さながらモダニズム建築の実験場の観を呈した。のべ50万人以上

²² Gaston Bachelard, *La poétique de l'espace*, Presses Universitaires de France, 1957, p.26. 引用文は、サルトルの名はあげられていないが、「意識的形而上学」を批判したもの。

²³ Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum*, Verlag W. Kohlhammer, 1963 (10.Auflage 2004), S.125.

²⁴ Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini*, Kluwer Academic, 2008 (Original edition: Martinus Nijhoff, 1971), p.166. もちろん、これは苛烈なハイデガー批判の書。

²⁵ Zit. nach: Hans M. Wingler, *Das Bauhaus 1919-1933. Weimar-Dessau-Berlin und die Nachfolge in Chicago seit 1937*, DuMont Buchverlag, 2009 (sechste Auflage), S.26.

²⁶ Kenneth Frampton, *modern architecture A CRITICAL HISTORY*, Thames & Hudson, 2007 (fourth edition), p.115.

もの観客が来訪し、賛否両論がわき起こった。たしかに、〈建てること〉〈住むこと〉への新しい提案がここにはあった。〔資料①②参照〕

この国際住宅展は、計画段階では、「新時代(Neuzeit)の住まい」²⁷とよばれていた。「われわれの生活の全領域にたいする合理化(Rationalisierung)は、住宅問題においても容赦しない」²⁸のものであって、いまや「合理的な建てることと住むこと」²⁹が要求されており、「現時点において合理的な住むことを諸事例にそくして示すことが重要である」³⁰。ところが、この目的を実行しようとした建築家には、以下に一瞥するように、さまざまな立場³¹があった。

まず、もっとも影響力のあるモダニズム建築家として、ル・コルビュジエの名をあげることができるだろう。かれの晩年の傑作「ロンシャンの教会堂」(1955)にはハイデガーも訪れたことがあって、「ここには、ゴシック以来はじめて、《聖なる空間》がふたたび存在している」³²と賞賛したと伝えられる。ヴァイセンホーフ・ジードルングにおいても、ル・コルビュジエの住宅は建築的価値の高いものとみなされ、現在は博物館となっている。かれはモダニズムの論客としても有名であって、「家は住むための機械(machine à habiter)だ」³³という、『建築をめざして』(1924)の主張は、よく知られていよう。かれのモデルハウスは、ドイツ工作連盟の機関誌『形式(Die Form)』に寄稿された「新しい建築のための5つの論点」で提唱された理論にしたがって、「ピロティ〔支柱〕」「屋上庭園」「自由な平面構成」「横長の窓」「自由な正面構成」からなる「根本的に新たな美学」³⁴を具体化したものである。〔資料③参照〕

つぎに、〈合理化〉という問題にもっとも関心を寄せていたのが、当時 Dessau の Bauhaus 校長だったグロピウスである。「すっかり仕上げられ、しかも可変的な、倉庫からの住宅建造物が、今後数十年のうちに、産業の主要製品になるだろう」³⁵。この

²⁷ *Briefe zur Weißenhofsiedlung*, ausgewählt und herausgegeben von Karin Kirsch, Deutsche Verlags-Anstalt, 1997, S.39.

²⁸ A.a.O., S.41.

²⁹ Ebd.

³⁰ A.a.O., S.55.

³¹ 代表的なモダニズム建築家群像については、ピーター・ブランデル・ジョーンズ『モダニズム建築——その多様な冒険と創造』(中村敏男訳、風土社、2006)が、興味深いサーヴェイを提供してくれる。

³² Dieter Jähnig, *Die Kunst und der Raum*, in: *Erinnerung an Martin Heidegger*, Verlag Günther Neske, 1977, S.136.

³³ Le Corbusier, *VERS UNE ARCHITECTURE*, Les Édition G.Crès et Cie, 1924, p.83

³⁴ *Die Form*, Zeitschrift für gestaltende Arbeit, Verlag Herman Reckendorf, 1927, S.272-274.

³⁵ A.a.O., S.277.

予言は、バウハウスの機能主義的なデザインがしばしば批判されてきたように、きわめて不幸なかたちで現代社会に実現したというべきだろうか。けれども、「そのような合理的な建築方式の特別な長所は、経済性がいっそうよくなったり生活水準がいっそう高くなったりする」³⁶だけではない。かれは「モダンな家の美しさ」を「空間的な調和、落ち着き、端正な比例」のうちにみとめ、「われわれの時代の生を純粹で単純化された諸形式のうちに表現することを、われわれは学んできた」³⁷。

さらに、何人かの建築家の思想をたどっておこう。桂離宮を絶賛した『ニッポン』で知られているタウトは、ベルリンで多くの集合住宅を手がけたモダニズム建築家だったが、この展示会場に並んだ住宅のなかで「プロレタリアート」³⁸ともいうべき低廉な家を建てた。また、ウィーンの建築家ヨーゼフ・フランクは、ル・コルビュジエなどとは異なり、「エンジニアと建築家との共同作業などというものは……みこみがない」³⁹と主張して、ゆずらなかつた。そして、ヴァイセンホーフ・ジードルングの芸術監督をつとめたミースによれば、「《合理化と類型化(Typisierung)》といった合言葉も、住宅業の経済性への訴えも、たんなる部分問題にかかわるにすぎない。……これらとならんで、あるいはいっそう適切には、これらを超えているのが、ある新たな住まいの創造という、空間にかかわる問題である。これは、ひとつの精神的な問題であって、ただ創造的な力によってのみ解決することができるが、計算や組織といった手段で解決できるものではない」⁴⁰。ミースの確信するところでは、「ただいきいきとした内面のみが、いきいきとした外面をもつ」⁴¹。

このように把握するなら、ヴァイセンホーフ・ジードルングを総括した、つぎのシャロンの言葉は、きわめて適切だといえるだろう。すなわち、「展示会の獲得成果として確定しているのは、さまざまな個性と国家にもとづき個々の建物を個人的に造作したにもかかわらず、ジードルングの全体像に統一性があることである」⁴²。しかし他方で、「願望と希望として残りつづけるのは、……生命あるものを機械化することな

³⁶ Walter Gropius, *Die neue Architektur und das Bauhaus*, Neue Bauhausbücher, herausgegeben von Hans M. Wingler, Gebr. Mann Verlag, 2003, S.18.

³⁷ Ebd.

³⁸ *Die Form*, a.a.O., S.282.

³⁹ Josef Frank, Was ist modern?, in: *Die Form*, Zeitschrift für gestaltende Arbeit, Verlag Herman Reckendorf, 1930, S.402.

⁴⁰ *Die Form*, Zeitschrift für gestaltende Arbeit, Verlag Herman Reckendorf, 1927, S.257.

⁴¹ A.a.O., S.59.

⁴² A.a.O., S.294.

しに類型化することである」⁴³。この願いは、ポストモダンの時をこえて、現代のわれわれにまで届いていたとしても、おかしくはなかった。だが、新たな建てることと住むことをもとめたドイツ工作連盟の夢は、ナチスの政権掌握とともに、あえなくついでた。ネルディンガーが指摘しているように、「ヴァイセンホーフ・ジードルングへの道は……工作連盟の誤りだった」と、1933年には回顧されることになる⁴⁴。

最後に、前衛建築家たちの思想的背景をさぐっておきたい。前述のグロピウスやミースの発言において察知できるのは、**モダニズム思想家としてのニーチェ**の影響である。まだバウハウスがヴァイマルにあったころ、ニーチェアーナーのグロピウスは、その地のニーチェ資料館——ニーチェの妹がいまだ君臨していた——と良好な関係をたもっていた⁴⁵。また、バウハウス最後の校長となったミースは、ニーチェ資料館に近い関係の雑誌『未来(Die Zukunft)』の定期購読者であり、「建造物は時代意志の純粹な担い手である」と確言した⁴⁶。かれらを鼓舞したニーチェによれば、「文化とはなによりもまず、一民族の生の表現すべてにおける芸術的様式の統一である」(KSA1,163)。「生」の創造する〈様式〉と〈形式〉が重要なのであって、「芸術家の偉大さは、かれが引き起こす《美しい感情》によって測られるのではない。……そうではなく、かれが偉大な様式にどれだけ近づいているか、偉大な様式にどれだけふさわしいかという程度によってである。……人がそれであるカオスを支配すること、みずからのカオスを形式になるように強いること、形式において必然性となること、すなわち、論理的に、単純に、一義的に、数学となること、法則となるということ——このことがここでは大きな野心である」(KSA13,246f.)。

これらの引用文について、ハイデガーもとりわけ詳細に論じている(GA46,54-65; GA43,145-169)。偉大な様式においては、ディオニュソス的なものとアポロ的なものとの、「陶醉と美との、創造・享受と形式との交互的関与の統一」(GA43,168f.)が実現されねばならず、「ニーチェが偉大な様式として思惟し要求するものへの展望とともに

⁴³ Ebd.

⁴⁴ Winfried Nerdinger, Neues Bauen—Neues Wohnen, in: *100Jahre Deutscher Werkbund 1907/2007*, Architekturmuseum der TU München, 2007, S.145.

⁴⁵ Peter Bernhard, »Ich-Überwindung muß der Gestaltung vorangehen«. Zur Nietzsche-Rezeption des Bauhauses, in: *Esoterik am Bauhaus*, herausgegeben von Christoph Wagner, 2009, S.32.

⁴⁶ A.a.O., S.31. 『未来』という雑誌については、『建築家の講義——ミース・ファン・デル・ローエ』(小林克弘訳、丸善株式会社、2009) 49頁に関連記事がある。なお、ドイツ工作連盟設立者のひとりムテジウスへのニーチェの影響については、つぎを参照のこと。Reiner K. Wick, Der frühe Werkbund als »Volkserzieher«, in: *100Jahre Deutscher Werkbund 1907/2007*, a.a. O., S.52.

に、われわれはかれの《美学》の頂点に到達した」(GA43,168)。しかしこの様式概念のうちに「存在と生成との区別」(GA43,166)という伝統的存在把握をかぎとるのが存在歴史的思惟の立場であり、「ニーチェ哲学は西洋形而上学の終末である」(GA43,283)というニーチェ観がやがて確立されることになる⁴⁷。

ところが、モダニズム建築家やハイデガーの思惑をよそに、「偉大な様式」はナチ国家体制のもとでおぞましい様相をおびはじめた。すぐに思い浮かぶのは、アルベルト・シュペーアがベルリンのシュプレー・ボーゲンに計画した、誇大妄想的な権力欲の表現以外のなにものでもない、直径 290 メートルにもおよぶ巨大ドームの大会堂である。こうした時代の趨勢のもとで、ハイデガーは、当時もてはやされた新古典主義の代表的建築家カール・フリードリヒ・シンケルの遺稿の一節に批判的論評を加えたりし(GA65,506)、ナチ芸術との関連でよく語られる「《キッチュ》」(GA66,31)についても言及した。たとえかれがモダニズム建築について論じた形跡はなくとも、まぎれもなく両者は同じ困難な時代を生きていた⁴⁸。

3. 〈技術の時代〉における〈詩作と思惟〉

工業化の進展によって鉄やガラスなどの建築素材が新たに登場し、それとともに人々の〈住む〉仕方も変わっていった。19世紀以来の、このような住環境の変貌にきわめて明敏な感覚をもっていたのが、『パサージュ論』のベンヤミンだった。「温室庭園やパサージュ、つまりもともとはぜいたくな施設とともに、鉄骨建築ははじまった。だが、またたくまに鉄骨建築はその真なる技術的かつ産業的な適用領域を見いだすことになった。そして、市場用ホール、駅、博覧会会場といったまったく新しい需要から生まれた、過去に手本をもたない建造物が成立した。先駆的な仕事をしたのはエンジニアたちだった」⁴⁹。縷説するまでもなく、われわれのあらゆる生活空間を刻印する、いわゆる「技術の時代」(GA66,175; GA11,107; usw.)が到来した。

興味深い事例をあげておこう。さきのヴァイセンホーフ・ジードルングと同年のこ

⁴⁷ 「ハイデガーによれば、ニーチェの形式概念は、まったく数学的で論理的なものにとどまった」という解釈は、どうだろうか。John Salls, *Die Verwindung der Ästhetik*, in: *Heidegger-Jahrbuch 2 Heidegger und Nietzsche*, Verlag Karl Alber, 2005, S.205.

⁴⁸ ナチズム時代にモダニズム建築が完全に抹殺されたわけではない。ネルディングガーによれば、国家表象を目的とするさいは新古典主義、ヒトラーユーゲント・ハイムや学校などのためには「血と土地の建築」、工場などの実用建築には機能主義的モダニズム建築というように、様式の定められた用法があった。ヴィンフリート・ネルディングガー『建築・権力・記憶』(海老澤模奈人訳、鹿島出版会、2009) 204 頁、参照。

⁴⁹ Walter Benjamin, *Das Passagen-werk, Gesammelte Schriften Bd.5-2*, Suhrkamp, 1991, S.1061.

と、「1927年というこの年に、『技術の哲学(Philosophie der Technik)』はその50周年記念祭を祝うことができる」⁵⁰と、ドイツ工学士協会の機関誌『技術と文化』所収の論文が告げていた。ここで触れられているのはエルンスト・カップの『〈技術の哲学〉の基本線』(1877)であり、これが書名として登場した最初とされる。しかし上記論文の現状分析によれば、「技術は文化要因として、文化のほかの諸要因との交互作用において提示されねばならない」⁵¹ののだが、「この本〔カップ上掲書〕ばかりでなく後の同名の諸著作も、ほんとうの〈技術の哲学〉をいまだ提供してはいない」⁵²。たしかに、『技術の哲学』と題された本にはエーベルハルト・チンマー(1914)やフリードリッヒ・デッサウアー(1927)によるものがあつたけれども⁵³、技術を文明からではなく文化から精神的に把握しようとする時代の要請は、とくにドイツで強かった。

もちろんハイデガーはこの時代動向を熟知していた。かれが技術について論じるさい、エルンスト・ユンガーが重要である⁵⁴。が、そればかりではない。かれは高名な経済史家ヴェルナー・ゾンバルトの技術論を評価していたし(GA76,208,299,344)、シュペングラーの友人マンフレッド・シュレーターの『技術の哲学』(1934)にも言及している(GA76,331,367)。シュレーターによれば、「技術の哲学とは、技術が創造的な人間精神の文化所産としてまずは理解されるべきであるから、一般的な文化哲学を構成する一章としてあつかうことができる」⁵⁵。このような影響関係を重く受け取るなら、ハイデガーが〈技術の本質〉とした〈組み立て(Ge-stell)〉という根本語が上述のカップに由来する⁵⁶、とする解釈が正しいと考えられるかもしれない。しかしじっさいは、

⁵⁰ P. K. Engelmeyer, Vorarbeit zur Philosophie der Technik, in: *Technik und Kultur*, Zeitschrift des Verbandes Deutscher Diplom-Ingenieure, 1927, S.86.

⁵¹ A.a.O., S.88.

⁵² A.a.O., S.86.

⁵³ Eberhard Zschimmer, *Philosophie der Technik*, Ferdinand Enke Verlag, dritte völlig umgearbeitete Auflage 1933 (erste Auflage 1914).

Friedrich Dessauer, *Philosophie der Technik*, Verlag von Friedrich Cohen, 1927.

⁵⁴ 拙稿「グローバル／ローカルな場としての技術哲学——カッシーラー・三木・ハイデガー——」、寄川条路編著『インター・カルチャー』(晃洋書房、2009)所収、参照。

⁵⁵ Manfred Schröter, *Philosophie der Technik*, Druck und Verlag von R. Oldenbourg, 1934, S.3.

⁵⁶ つぎの文献中の注釈に「……こうした事柄を《組み立て》とよぶのは、1877年のエルンスト・カップ『〈技術の哲学〉の基本線』に由来するといつてよかろう」とある。*Ernst Jünger - Carl Schmitt Briefe 1930-1983*, herausgegeben, kommentiert und mit einem Nachwort von Helmuth Kiesel, Klett-Cotta, 1999, S.719. ただし、この解釈に信憑性はないようだ。ハイデガーがカップの書の内容を知っていたのはまちがいないが、管見では、現時点で公刊されたハイデガーの全著作のなかに言及箇所が見あたらない。そればかりか、当該著書のなかで、Gestellという言葉はほとんど登場しない。「まるごとの人間は形態(Gestalt)である。骨格それじたいは Gestell である」といった文章では、説得力のある論

ハイデガーは〈技術の哲学〉を手厳しく批判しており、「あらゆる〈技術の哲学〉は、すでにその発端からして、本質の誤認である」(GA76,294; vgl. GA54,128)。

本発表に関連するかぎり、ハイデガーの技術思想を集約的に掲げておこう。技術はたんなる文化形成物ではなく、むしろ「《文化》は、形而上学的には、《技術》と同じ本質のものである」(GA66,170; vgl. GA76,298)。また、「芸術が形而上学的活動である」(GA87,12)とするなら、「美しいものの《美学的》把握が完全な支配権をはじめてにぎるのは、またも技術によってである」(GA66,175)。たとえば、「建築術(Baukunst)の《新たな技術的な》諸可能性——建築術もあらゆる芸術(τέχνη)と同様に《技術的なもの》のうちでつねに動いている」(GA76,364)。さらにハイデガーは、ナチズムと共産主義を同一平面にとらえるような、おどろくべき政治的見解に達していた。「《人種》とは、技術的—主観性適合的な概念」(GA90,99)なのであり、「惑星的に支配する人種の類型論と技術のうちで、人間の主観性は絶対的となる」(GA90,67)。同様に、レーニンの「社会主義(すなわち共産主義)とはソヴィエト権力+電化である」⁵⁷という言葉からすれば、「《社会主義》にとって技術の完成とその支配とがすべてである」(GA90,231; vgl. GA90,40; GA54,127; GA69,210)。ようするに、「主観性の本質帰結が諸民族の国家主義であり、民族の社会主義である」(GA69,44)。

上述から明らかのように、ハイデガーほど〈技術〉を威力あるものとして思惟しようとした思想家はいない。技術は、人間の意のままになる生産手段や文化事物などではなく、われわれを圧倒する〈存在〉の歴史的現実にはほかならず、「技術とはそれゆえ《形而上学》の本来的な完成である」(GA76,294)。しかも、けっして逸することができないのは、こうした技術が〈住む〉ことと根本でかかわっているということである。すなわち、「技術を制御したり抑制したりしようとするのではなく、技術を極限にまで助成すると同時にその本質を熟思すること、つまり、**原生起(Ereignis)のうちで住むことに備えること**」(GA76,255)、これがハイデガーの意図だった。「原生起のうちで住む」とは、『建てること、住むこと、考えること』によれば、こう描かれていた。「大地を救うことにおいて、天空を受け取ることにおいて、神的な者たちを期待することにおいて、死すべき者たちを同行とすることにおいて、住むことは、四方域を四重に

拠とはいえない。Vgl. Ernst Kapp, *Grundlinien einer Philosophie der Technik*, Druck und Verlag von George Westermann, 1877, S.219.

⁵⁷ レーニンのこの言葉については、以下を参照。Guido Huß/ Michael Tangemann, *Die Bedeutung der Elektrotechnik in der Gründungsphase der Sowjetunion*, in: *Technik und Staat*, herausgegeben von Armin Hermann und Hans-Peter Sang, VDI Verlag, 1992, S.120-136.

思いやること(Schonen)として原生起する」(GA7,153)。

われわれは、あらためて〈住む〉を、とくに〈建てる〉との関連において考えることにしたい。「人間が所属している諸領域のうちに家郷的に(heimisch)滞在することを、われわれは住むことと命名する」(GA50,92)のであり、つまり「住むとは、死すべき者たちがそのように存在している存在の、まさにその根本動向である」(GA7,163)。〈住む〉とは「人間の実存」(GA7,192)にほかならず、〈建てる〉ことはこれに根ざしていなければならない。「家は住むことによってはじめて家となる」(GA13,138; GA16,537)のであり、「われわれが住むことをなしあたうばあいのみ、われわれは建てることができる」(GA7,162)。だが、逆にいえば、われわれが〈建てる〉ことができるばあいのみ、ほんとうに〈住む〉ことができるようになる。というのは、「建てることの本質は〈住ませること(Wohnenlassen)〉だ」(GA7,162)からである。約言すれば、住むことと建てることとは、相互循環的にかかわりあっている。

また、もうひとつ重要な関連を指摘しておく、〈建てる〉ことは、それが〈住ませる〉ことであるかぎり、本質において〈詩作〉である。というのも、『詩作的に人間は住む』で、このべられていた。すなわち「詩作すること(Dichten)は、人間が住むことをなによりもまずその本質うちへと放ち入れる。詩作することは、根源的な〈住ませること〉である」(GA7,206)。したがって、「詩作することは、住ませることとして、建てることである」(GA7,193)。いいかえれば、ハイデガーは、「沈黙する語」(GA54,172)による〈建築〉に詩作との本質的な近さを認識していたがゆえにこそ、〈建てる〉ことを主題化しようとしたといえるだろう。このように解釈することによって、『建てること、住むこと、考えること』が成立しえた問題圏域が、はじめて判然となる。ほかでもない、〈詩作・と・思惟〉である。

ヘルダーリンとつねに対話したハイデガーであれば、〈詩作と思惟〉はいつか逢着する根本問題だったが、かれがこの問題に集中的に取り組んだのは、讃歌『回想』や『イスター』について講じた1940年代になってからだった。とりわけ、「四方域」(GA71,51)や「組み立て」(GA71,52f.)といった術語が登場する『原生起』(1941/42)において、この問題は詳論された。そこでも「ヘルダーリン——原存在歴史的思惟の命運」(GA71,88)という立場に変更はない。が、それにもかかわらず、かれの詩作とハイデガーの存在歴史的思惟とが「火」と「水」にたとえられているように(GA71,322)、以前の論述と比較するなら、「形象化する(bildend)語」(GA71,330)による詩作と「形象なき(bildlos)

語」(GA71,330)⁵⁸による思惟とが、するどく対比されるようになった。

概観すると、「詩作することは、祝祭——聖なるもののしばしのあいだ——を回想・思惟すること(An-denken)である」(GA71,239)が、「思惟することは、到来するものの来着へと先行・思惟すること(Vor-denken)である」(GA71,312)。また、「詩人は、聖なるものを言うことによって、とどまるもののとどまることを、存在者という家郷的なもののうちに住むことを創建する(stiften)」(GA71,329)。だが他方、「思惟者は……原存在という深淵を根拠づける」(GA71,329)のであって、「思惟することは、非家郷的に存在すること(Unheimischsein)のうちに家郷的となること(Heimischwerden)である」(GA71,330)。いいかえれば、「とどまるものを創建することとしての詩作すること」(GA71,239)にたいして、「原存在歴史的思惟は、脱・創建すること(Ent-stiften)である」(GA71,239)。このように、詩作と思惟の両者は、存在者と存在との〈差異〉および〈あいだ〉で⁵⁹、遠く隔たっている。

しかしながら、『パトモス』のなかで「最愛の者たちは、遠く隔てられた山々のうえに、[だが] 近くに住む」と詠われていたように、詩作と思惟とはきびしく対置されながらも、やはり共属しあっている。「詩作することと思惟することとの極限的な相克の親密性は、感謝すること(Danken)のうちにある」(GA71,330)。つまり、両者はもはや主観性の能動的な意志活動などではなく、乏しき時代にあっても天空と大地と神々からひそかな祝福を受けた「パンと葡萄酒という贈り物にたいする感謝」(GA75,53)⁶⁰であり、「……両者とも原存在の歴史から原生起させられている」(GA71,327)。

ここまで論じて、ついにわれわれは〈技術と詩作〉の関係に立ち入ることができる。つぎの一節を読まれたい。「詩作の反本質は計画すること(Planung)である。[しかしそれでも]詩作的に人間は住む——。人間がただかろうじて計画するときでさえもなお、

⁵⁸ Bild [形象／イメージ] という語は、危険な伝統的用語であるから、慎重に使用されている。Vgl. GA71,262,283,286,322,333. なお、『哲学への寄与論稿』で時間と空間を記述した(vgl. GA65,385f.)さいの根本語、すなわち〈脱自すること(Entrückung)〉と〈脱然となること(Berückung)〉とが、この関連で使用されているのが注目される。「思惟することは《形象-なし》で、〈脱然となること〉なしにある」(GA71,311)のにたいし、「詩作することは、脱自して言いつつも、脱然となることとして」(GA71,321)ある。

⁵⁹ これまでの引用から、思惟と詩作とが存在と存在者との〈差異〉という〈あいだ〉に張り渡されていることが、明らかだろう。このとき、存在と存在者のどちらかが優位を占めるということはない。超越論的思惟様式が放棄されて以降、「原生起は、原存在と存在者のための時空間的な等時性である」(GA65,13)とのべられていた。この存在と存在者との等時的な〈あいだ〉ないし〈差異〉が、さらに、〈差し担い(Austarg)〉や〈分かちあい(Unterschied)〉という術語で一貫して思惟されていく。「思惟するとは、〈分かちあい〉の〈差し担い〉へと脱・創建することである」(GA71,239)。

⁶⁰ ハイデガーは1943年に『パンと葡萄酒』の解釈をこころみている(GA75,45-56)。

すなわちそのとき人間は非詩作的に(undichterisch)《住む》、ということつまり、非本質において詩作的に《住む》(GA71,321)。われわれの時代を計画や計算によって駆り立てる「技術のうちには、詩作はない」(GA76,390)。しかし、たとえ「あらゆる技術の非詩作的なもの」(GA76,313)の闇夜がどんなに深くとも、「詩作的に人間は住む」⁶¹。「住むことが本質において詩作的であるがゆえにのみ、とある住むことが非詩作的でありうる」(GA7,206)。ここに、ハイデガーは技術支配からの救済の可能性を読み取ろうとした。われわれ人間の実存が根本において詩作的であるかぎり、詩作の本質が〈住ませる〉ことであるかぎり、その詩作に耳を傾ける思惟があるかぎり、そして詩作と思惟とのうちに「学ぶこととしての感謝」(GA75,301)が生きつづけているかぎり、〈住むことを学ぶ〉可能性はわれわれにまだ残されている。

おわりに

本発表の目的は、モダニズム建築とハイデガー居住論とを思想的に対決させることによって、〈住む〉という事柄について学ぶことだった。ヴァイセンホーフ・ジードリングを時代の例証として取り上げたわれわれは、最終的に、〈詩作と思惟〉〈技術と詩作〉という問題に突き当たった。ハイデガーの確信では、「ただひとつのことが芸術に該当する。芸術においては、詩作的なものが本質的に規定する力である」(GA76,375)。この詩作のうちに、技術の時代を突破する可能性をかれは洞察していた⁶²。

だが、本発表にたいして、こう反論する人がいるかもしれない。シュヴァルツヴァ

⁶¹ 「ありきたりのひとつの条件などといったものではまったくなく、詩作的なものは人間にとって根本的な条件である」。Cf. Dominique Pierson, *Sur l'habitation poétique de l'homme*, in: *Heidegger Studies vol.6*, Duncker & Humblot, 1990, p.107.

⁶² 現代芸術にたいするハイデガーの理解をしめす言葉に、「こんにちの芸術、すなわち、シュールレアリスム＝形而上学、抽象芸術＝形而上学、非対象芸術＝形而上学」というものがある。Günter Seubold, *Heideggers nachgelassene Klee-Notizen*, in: *Heidegger Studies vol.9*, Duncker & Humblot, 1993, S.10. なかなか手厳しいが、こうした状況のなかでかれがもっとも期待をかけたのが、パウル・クレーだった。周知のように、クレーを題材に『芸術作品の根源』の「第二部」ないし「続編」をかれが書こうとしたといううわさもある。この問題を調査したゾイボルトは、かれのつぎの文章を伝えている。「セザンヌにおいて準備され、クレーにおいてはじまるもの、つまり、〈こちらへともちきたらすこと(Hervorbringen)〉」。Günter Seubold, *Kunst als Enteignis*, Bouvier Verlag, 1996, S.130. 〈こちらへともちきたらすこと〉で念頭にあったのは、ギリシャ語のポイエーシスであろう。ポイエーシスには制作などの意味のほか詩作という意味がある。ハイデガーはクレーのなかに、技術の時代を内側から突きやぶる〈詩作〉をみとめていたのだろうか。クレーにかんするハイデガーのテキストがさらに公刊されることを期待したい。この関連で、つぎの論文も参照のこと。Siegbert Peetz, *Welt und Erde: Heidegger und Paul Klee*, in: *Heidegger Studies vol.11*, Duncker & Humblot, 1995, S.167-187.

ルトの魔術師がモダニズム建築を理解できたはずもなく、両者の関係をあつかう問題設定には無理がある、と。なるほどそうかもしれないが、かれくらい「合理的な建てることと住むこと」というモダニズムの本質を考えようとした思想家はいないのではないか。晩年の対談によれば、「わたしはけっして技術に反対して語ってはいませんし、技術のいわゆる悪魔的なものに反対していませんでした。そうではなくて、わたしは技術の本質を理解しようところみているのです」(GA16,706)。否定的な存在本質の圧倒的な力に耐え抜くこと、非家郷的なものうちに家郷的となること、これが思惟の課題である。〈技術の時代〉にあっても「《非詩作的》なものの中に《詩作的》なものは消失しない」(GA13,218)のであって、「非詩作的なものの中に詩作的なものを思惟すること」(GA13,220)こそ、ハイデガーの思想的営為だった。

詩「住むこと」(GA81,328)という一種のパロディのなかで、ハイデガーは、当今の「住宅難」(GA7,191)などについて語るはるか以前に、われわれの住むことが深部において危殆に瀕していると警告する。

いさおし
功業もなく、非詩作的に
こんにち人間は住む、
星々から疎遠となりつつ、
大地を荒廃させつつ。

本発表の行論をたどってきたわれわれからすれば、これがけっして絶望的な時代診断でないことは明らかだろう。だから、住むことを学ぼうとするわれわれは、あらためてつぎのように問おう。もともとたんなる職人たちの技術ではなく、それら諸技術を原理的な知によって監督指導する技術だった〈建築 (ἀρχιτεκτονική τέχνη)〉は、こんにち、詩作たりうるか。現代の建築は、死すべき者たちを住まわせる〈建てること〉、すなわち、大地と天空、神々と人々を思いやる〈詩作〉たりうるか、と。

付記

本発表のために、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)として採択された「〈住む〉ことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築——」(2010～2012年度)の助成を受けた。